

黄耆建中湯

出典 『金匱要略』

主効 表裏、虚勞、虚弱体質改善薬。大虚勞の薬。

組成

桂皮 4 甘草 2 大棗 4 芍薬 6 生姜 1～1.3 黄耆 4
(膠飴 10)

小建中湯

桂皮 甘草 大棗 芍薬 生姜 膠飴

黄耆

解説

本方は一般に小建中湯(549頁)に黄耆を加えたものと解される。

【小建中湯】…虚勞を治療し、虚弱体質を治療する薬である。

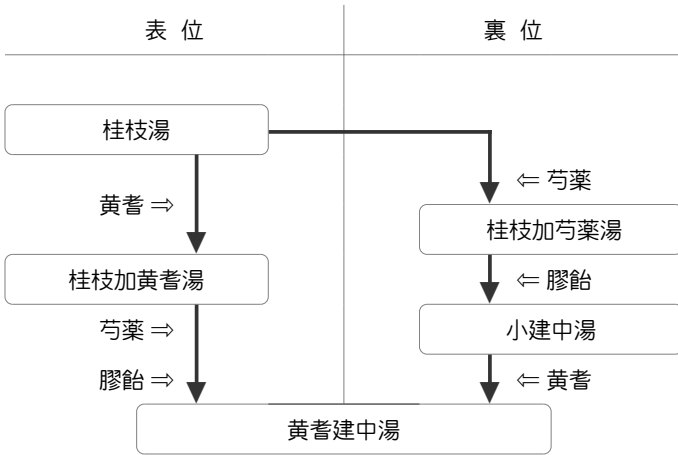
【黄耆】…代表的な固表薬であり、補気薬でもある。普段から皮膚の抵抗力が弱く、また汗腺機能も低下していて、自汗を来たし易い衛氣の虚の状態に対して、肌表の血液循環を改善して皮膚機能を高め、自汗を止め、四肢の疼痛・知覚異常を軽減するのみでなく、慢性化した皮膚潰瘍を治癒に導く。更には全身の慢性衰弱状態に対しても強化しつつ、全身の筋肉の緊張を強化する。一方、全身の浮腫に対しては利尿により消腫するが、腎炎に対して蛋白尿を軽減し、全身状態を改善する作用も認められている。『薬性提要』には、「表を固めて汗を止め、中を補いて元気を益し、膿を排して内托す」とある。

従って、一般的には小建中湯よりも一層虚勞の程度が強いものが適応となる。

しかし、別の見方をすれば、方剤組成上からは桂枝加黄耆湯(203頁)に芍薬を倍増し、膠飴を加えたものとも解される。桂枝加黄耆湯は皮膚の抵抗力を強化し、自汗を止める他、全身に浮腫を来たした腎機能低下に対し、消腫すると共に蛋白尿を軽減する薬であるが、薬性方向は主に表にある。そこで、桂枝加黄耆湯に芍薬を倍増して膠飴を加え、方剤の薬性方向を裏

にも向かわせ、裏の作用として消化管平滑筋の蠕動亢進による末梢性の腹痛や自律神経失調による腹痛に対しても抑制的に作用する。

このように、黄耆建中湯は小建中湯からの展開と、桂枝加黄耆湯からの展開の二面性を有する。だが、元々は桂枝湯(192頁)からの二方向性への展開の終着形であることは言うに及ばない(図1)。



(図1) 桂枝湯から黄耆建中湯への流れ

総じて、表裏共の大虚勞を治する薬である。

適 応

小建中湯証より重症の場合、全身疲労倦怠、術後・大病後などの衰弱・微熱・盗汗・食思不振・息切れ・動悸・眩暈、慢性皮膚潰瘍、難治性瘻孔、難治性痔瘻、褥瘡、慢性中耳炎、脊椎カリエス、蓄膿症、流注膿瘍、MRSA感染症、慢性化膿性炎症、慢性胸膜炎、過敏性腸症候群、慢性腹膜炎、結核性腹膜炎、小児反復性臍疝痛、夜尿症、夜啼症、疰夏病、虚弱体質など。

論 考

① 本方の出典は、『金匱要略』血痺虚勞病脉証并治第六に、「虚勞、裏急、諸々の不足には黄耆建中湯之を主る」とあることに拠る。条文中、裏急即ち腹部牽引痛は必発症状ではない。広く虚勞に用いられ、更に虚勞の裏急

にも効果があるという意味に解するべきである。

尚、原典条文に続いて小字双行で、「小建中湯の内に於いて黄耆一兩半を加う。余は上の法に依る。○気短く、胸満つる者には生姜を加え、腹満つる者には棗を去りて茯苓一兩半を加う。及び、肺の虚損・不足を療し、気を補うには半夏三兩を加う」と補記される。

②『金匱要略心典』血痺虚劳病脉証并治第六には、原典の条文に対して、「裏急とは、裏虚し、脉急にして腹中に當に痛みを引くべき也。諸々の不足とは、陰陽の諸脉並びに俱に不足して、眩・悸・喘・渴・失精・亡血等の証、相因りて至る也。急なれば之を緩むるに必ず甘を以ってし、不足すれば之を補うに必ず温を以ってす。而して虚を充たし、空を塞^みたすには、黄耆尤も専ら長ずること有る也」と解説される。

③『備急千金要方』第十九 腎藏・補腎第八・黄耆建中湯方の方後の加減法には、「嘔を作す者には生姜を倍し、腹満つる者には棗を去りて茯苓四兩を加えて佳なり」とある。即ち、小建中湯の論考①でも触れたように、原則として嘔家には建中湯は処方しないが、投与する必要があるときには生姜を倍加するとの謂である。

更に本文に続いて「……深師に、虚劳、腹満ち食少なく、小便多き者を治するに、飴糖無くして人参二兩・半夏二升有り。又、大虚不足、小腹裏急、劳寒、臍に拘引し、気上りて胸を衝き、短気、言語謬誤し、食すること能わず、吸吸として気乏しく悶乱するを治すと。必効方に、虚劳にて下焦虚冷して甚だしくは渴せず、小便数なる者を治するに人参・当帰各二兩有り。若しくは失精するには竜骨・白斂各一兩を加うと。古今録驗に、虚劳、裏急、小腹急痛し、気胸脇に引きて痛み、或いは心痛して短気なる者を治するに、乾姜を以って生姜に代え、当帰四兩を加うと」との注文がある。

④ここで云う『古今録驗方』の加減方は、実際上は華岡青洲の帰耆建中湯である。更にまた、許叔微撰『普濟本事方』卷第八・傷寒時疫上に、「予曰く、麻黄の証なりと雖も、尺遅弱なり。仲景の云く、尺中遅なる者は榮気不足、血気微少なり、未だ発汗すべからず。予、建中湯に於いて当帰・黄芪を加えて飲ましむ」ともあって、黄芪建中加当帰湯と命名されている。

⑤『太平惠民和剂局方』卷之五・補虚損 附 骨蒸^{シシヤウ}には、「黄耆建中湯 男子・女人の諸虚不足、小腹急痛、脇肋臑脹、臍下虚満、胸中煩悸、面色萎黄、唇口乾燥、力少なく身重く、胸満短気、腰背強痛、骨肉酸疼、行動すれば喘乏し、飲食すること能わざるを治す。或いは労傷過度に因り、或いは病後に常に復さざるに因るは並びに宜しく之を服すべし」とあって、白芍薬・肉桂・黄耆・甘草を姜棗煎じ、飴少許を入れて再煎する。

尚、同処にはまた、「黄耆六一湯 男子・婦人の諸虚不足、肢体劳倦、胸中煩悸、時に復た焦渴し、唇口乾燥、面色萎黄、飲食すること能わず、或いは先ず渴して瘡癩を癩せんと欲し、或いは癰疽を病みて、後に渴する者を治す。宜しく此れを服すべく、常に服すれば血気を平補し、五蔵を安和す」とあり、甘草一兩・黄耆六兩を棗煎するべく指示される。即ち、この条文は事実上、黄耆の薬能を列記しているに等しい。

⑥『仁斋直指附遺方論』卷三・湿・中湿証治には、「黄耆建中湯、傷湿にて鼻塞・身痛するを治す」とあり、黄耆・辣桂・甘草・白芍薬を籩散し、姜棗煎服するが、ここでは膠飴は用いられていない。

⑦尚、李恒撰『袖珍方』卷之三・自汗には、「黄耆建中湯 和剂方に方載する諸虚門には、男子・婦人の血氣不足にて、体は常に自汗するを治す」と簡略して記載される。

⑧梶原性全著『万安方』卷第十四上・虚劳門上・諸虚劳通薬には、「黄耆建中湯^{良驗方}男子・女人の諸虚不足にて小腹急痛・脇肋臑脹・臍下虚満して胸中煩悸し、面色萎黄・唇口乾燥して力少なく身重く、胸満短気し、腰背強り痛み、骨肉酸疼・行動喘乏して飲食すること能わざるを治す。或いは労傷して度を過ぐるに因り、或いは病後に復さざるに因るは並びに宜しく之を服すべし」とあって、白芍薬・黄耆・桂心・甘草を姜棗煎した後、飴少許を入れて再煎溶解することになっている。その後には『千金方』、『深師方』、『必効方』、『古今録驗方』、『究原方』の加減法が列記されている。

但し、通常の書式では薬味記載後に調理が指示されるが、ここでは調理が条文に続いて記載され、その後には先の四味が列記されていて、些か新奇な感を抱く。尚、調理文の直後には局方と小字注され、『千金方』、『深師

方』、『必効方』、『古今録驗方』の加減方は先の③と略同であり、『究原方』については「究原方、気虚の盗汗を治するには防風を加えて煎ず」と記載される。

また、卷十四下・虚劳門上・諸虚劳通薬には、「黄耆建中湯 必用方 諸虚不足にて邪正相干し、寒痰嗽逆・吐血咯血して煩倦して力少なきを治す」とあって、乾大枣・生姜・黄耆・甘草・官桂・芍薬・人参・半夏と指示され、姜枣煎の後に膠飴或いは糯米飴少許を入れて再煎温服するべく指示される。

尚、『良驗方』は『無倦斎衛生良方』か。この書を含めて『深師方』、『必効方』、『古今録驗方』、『究原方』、『必用方』は何れも亡佚書である。といっても、『深師方』、『必効方』、『古今録驗方』の加減法は恐らく『千金方』記載からの孫引きであろう。

⑨曲直瀬道三原著、曲直瀬玄朔増補『衆方規矩』卷之中・自汗盗汗には、「**黄芪建中湯** 表虚して自汗止まざる者を治す。陽虚甚だしき者に尤も之を用ゆ」とあるが、ここでは膠飴は用いられていない。続いて、「按ずるに、盗汗に当帰六黄湯を用い、自汗に黄芪建中湯を用ゆる、此れ、常の法にして陰陽の変に達せざるなり。若し自汗して発熱するは、此れ陰虚の症なり。当帰六黄を用いて地骨皮を加うべし。此れ、陰虚すれば陽必ず湊まる故なり。盗汗して悪寒し、肢冷ゆる者は陽虚に属す。黄芪建中を用いて附子皮を加うべし。陽虚すれば陰必ず湊まる故なり。此れ陰陽相乗じ、^レ寐寤相更る。達人にあらざれば語りがたし」と、自汗・盗汗よりも陽虚である点を捉えるべきとの奥深い解説である。尚、当帰六黄湯は当帰・黄耆・生地黄・熟地黄・黄柏・黄芩・黄连を煎じる。

⑩『養寿院医談』には、「積気、時に発熱・悪寒・盗汗す。此れ、外邪に非ず、積気より生ず。黄耆建中湯」とある。ここで積気とは消化管の痙攣痛のこと。

⑪また、吉益東洞口授『方極』黄耆建中湯には、「小建中湯証にして盗汗或いは自汗ある者を治す」とある。一般に本方は小建中湯加黄耆として、小建中湯の適応証としての虚劳の程度の強いものと考えられているが、

『方極』での条文にあるように、小建中湯証よりも肌表の衛気の虚の症状の明確な状態も適応となり、単に小建中湯を処方上強化したものではない。

⑫ 饗庭積山口授『饗庭家秘説』巻之九・黄耆建中湯補劑之弁には、「補中益気湯は脾胃下陷を升提するを以て補の本旨とす。此の黄耆建中湯は只中気の不足をとり建てんと云うを以て補の本旨とする也。……今、建中と云わば、中に居るところの脾の虚しかるを建立し、とりたてると云う意を以て建中湯とは名付けたるもの也」と云う。

また、**自汗盗汗**には、「この建中湯、能く自汗・盗汗に用ゆる主方なりといえども、白虎、小柴胡などの如き邪実の自汗・盗汗に誤りて用ゆるときは、其の病治せざるのみにあらず」とも解説される。

更には、**汗後身痛之弁**には、「又、傷寒汗を発して後に身痛みて脉弱するものに、この黄耆建中湯を用いて妙なり。是れ、中気虚するが故に汗後身痛する也。是れ亦、この方、正面の証なりと知るべし。△此の方、自汗盗汗を主るといえども、其中、自汗に専ら用ゆる方なりと知るべし」とあるのも参考になる。

⑬ 『類聚方解』黄耆建中湯には、先ず「裏病にして表に迫る也」との後、「小建中湯証にして気急尤も劇しく、皮膚に水気有る者を治す。其の証闕くも、当に身体不仁或いは疼重、或いは盗汗、或いは自汗等の証有るべき也」と、その証を欠くと記載されるが、原典条文は一つの証を表現していると考える。

⑭ 津田玄仙著『療治経験筆記』巻之五・六・汗門には、「**黄耆建中湯**陽虚する者、陰必ず乗ずる故に厥を發して自汗す。此の方之を主る。甚だしき者、少しく附子を加う。△営血不足し、自汗するには此の方に当歸を加え、甚だしき者は熟地を加う。黄耆・桂・芍・生姜各中・大棗小・膠飴」と記載される。ここでは甘草は処方されないことになる。

⑮ 『腹証奇覽翼』初編下冊・小建中湯図には、「○若しくは此の腹証(図2)にして、肌膚の乾くこと甚だしく、或いは自汗・盗汗あるもの、黄耆建中湯を用ゆべし。証に曰く、虚勞・裡急・諸々の不足と」とあり、更に小字双行にて「諸々の不足とは、気血ともに充足せざるの謂也。案ずるに黄耆

は正気を肌表にはりて、津液をめぐらすの能あり。諸々肌表の不足するものは、皮膚乾いてうるおいなく、衛氣、腠理を固めざるゆえ、津液もれて自汗・盗汗となりいづるなり。黄耆、正気をはり、津液をめぐらし、腠理をして固からしむれば、瘀水は自ずから回り降りて小便に通り、肌膚を滑らかにして潤沢を得るなり。抑々黄耆は自汗・盗汗を治すといえども、一に正気の不足によるものとすれば、これを以って主能とすべからず。余が門の黄耆を用ゆる、汗の有無を必とせず、^{ただ}俱肌膚の正気乏しきもの



(図2) 『腹証奇覽翼』・小建中湯圖

のを診し得て誤らずとす」と、肌膚の正気の乏しきものを強調している。

⑯『古訓医伝』卷十五・風寒熱病方緯篇二・弁中風歴節病脉証并治法第六には、原典条文に対して、「この条は上の条（小建中湯の条）を受けて、上の条に云う所の病状は勿論、始めの凡例に示したる虚脱の病因並びに一切亡血虚家の証をも含蓄して、諸不足と云いたるなり。黄耆は表水を和順する薬なれば、第一盗汗の証にかかるなり。其の外、気血衰えて表水の和順せざるにもかかるなり。よく水を行らして血分に和せしむるの功能あり。方後に気短・胸満の者、生姜を加うとあり。これ水気、胸中以上に動きて、悸する勢いあるを気短・胸満と云えり。真に水のみ迫りて短気する証にあらざれば、気短と称す。水動きて胸に逼れども凝血する程のことはなく、唯水につれて虚気、胸満するを以って生姜を倍加するなり。黄耆桂枝五物湯の生姜六両とあるをも併せ考うべし。腹満には茯苓を加うとあり。一通り実証ならば、上の胸満もこの腹満も、枳実のかかるべき証なれども、元

来虚勞にして、諸不足と云いたる内に、十分虚乏の意を喩したれば茯苓を加えたるなり。上の生姜を加えたる意を以て工夫すべし。肺の虚損・不足を療するは半夏三兩を加うとあるも、亦上の生姜・茯苓の加味の意を以て合点すべし。これ十分不足し、胸膈の氣、虚乏にして利せざる故に、別に痰喘などの外候は見えざれども、呼吸につれて開闔する所の肺の氣虚して、スラスラせざるを以て肺虚損・不足と云えり」と、加減法に於いても詳しく解説される。

⑩大塚敬節先生は『漢方と漢薬』第七卷第九号・小兒治験八例で、五歳男子の「色の白い、やわらかく肥った子供で、夏でも冬でも時々風邪をひく。風邪をひくと、すぐ鼻水が出て咽喉に痰が絡まり、細かい咳が頻発し仲々よくなる。その時、熱は大で多くて三十七度一・二分位以上には上らないと云う。……最初に来院した時の処方には裏に寒ありというわけで人参湯であった。これを七日分与えると今迄より元気になった。食欲も出で、鼻水も止ったが、咳の方はサッパリしない。一週間程経って来た時黄耆建中湯を与えた。するとこの一服の薬が咽喉を越したと思うとそれきり咳は出なくなった」という即効的症例を報告されている。

⑪龍野一雄編著『新撰類聚方』黄耆建中湯には、「一、小建中湯よりも表裏の虚が一段と著しく後世方の十全大補湯証という所に使う。……三、潰瘍・漏孔・中耳炎・蓄膿症・痔漏・膈炎などで虚証で分泌物が薄く多量のもの」との解説がある。実際、十全大補湯(523頁)は、本方の上に積極的に血虚に対する配慮がなされた方剤である。

⑫山本巖著『餐英館療治雑話解説』黄耆建中湯には、「自汗は、表虚して汗を制することができない状態である。黄耆は虚弱、衰弱の者に用い、疲れ易いのを元気にする。元気がなく、体力が弱って表虚し、自汗の出る者に用いて、自汗を出なくする作用がある。自汗には黄耆建中湯、即ち、小建中湯に黄耆を加えて用いるか、大四君子湯(四君子湯加黄耆)、補中益気湯、又、四君子湯合玉屏風散(白朮・防風・黄耆)もよい」と解説されている。